

2025年7月6日 第二礼拝

説教題「イエス・キリストの名」使徒言行録3章1～10節

主任牧師 加藤 誠

**「ペトロは言った。『わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名で立ち上がり、歩きなさい。』」(使徒言行録3:6)**

エルサレム神殿の正面にある「美しい門」は人々の誇りでした。人びとは美しい彫刻が施された壮麗な門を見上げながら、神をほめたたえ賛美歌を口ずさみながら神殿の中に入っていました。しかし、神を見上げて賛美する人びとの中でどれだけの人が「美しい門の下に座る人たちの現実」に目を注ぐことができているのでしょうか。「障がい」のゆえに働きたくても働くことが出来ず、毎日そこに置かれて施しを得て一日一日を生きていく。その彼女彼らも神殿の中に入って神を賛美したいと願っている一人ひとりであることを、どこまで自分のこととして感じていたのでしょうか。「天に栄光、地に平和」。主イエスが馬小屋の飼い葉桶に生まれた時、天使たちは歌いました。「天の神の栄光と、地に生きる一人ひとりの平和と」。その両方をつなぐために主イエスは私たちの間に生まれてくださいました。天を見上げて神を賛美することと、地の現実性に目を注いで平和を祈ることと。天と地と、その二つを切り離してしまうことなく、いつもつなげて考え祈っていくように教会は招かれているのです。

ペトロとヨハネは主イエスがそうであったように、門の下に置かれている一人の人に心を向け目を注ぎます。生まれながら足の不自由な人でした。「わたしたちを見なさい」。何かもらえんと思つて二人を見つめる人に向かってペトロは言います。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名で立ち上がり、歩きなさい」と。「金や銀はない」。この言葉に男はガッカリしたかもしれません。しかし「イエス・キリストの名」、私たちが十字架につけた人、しかし神がよみがえらせた人の名が、この男の現実を変えます。7～8節「そして、右手を取つて彼を立ち上がらせた。すると…神を賛美し、二人と一緒に境内に入っていた」。それまで神殿の外に置かれて、礼拝から遠ざけられていた人が、人びとと一緒に神殿の中に入り、一緒に礼拝する者とされたのでした。

「イエス・キリストの名」。私たちの罪の絶望を、復活の希望に変える名。このイエス・キリストの信仰と希望こそが、この世界の中にあつて私たちを立ち上がらせ、日々を生きる力を与えるのです。今朝の箇所です。三つの言葉に目をとめたいと思います。

一つ目はペトロの言葉です。6節「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう」。お金を持たないペトロたちが唯一持っているもの、それが「イエス・キリストの名」でした。実際、あの弱虫だったペトロを強くして立たせているのがイエス・キリストの名でした。エルサレムの人々から見ると、ガリラヤの田舎から出てきて方

言丸出しの男たち。どう見ても「普通の無学な人」でしかないペトロたちが、堂々と人々の前で聖書からイエス・キリストの救いを語っていく。それは不思議な光景でした。そんなペトロたちを見ていると「あなたたちは何で立っているのか」と問われる思いがします。わたしは「イエス・キリストの名」以外、何も持ち得ていない…というほど小さくされているだろうか。キリスト者と言いながら「イエス・キリストの名」以外のもの立っていることの多い自分たちではないかと問われるのです。

二つ目は8節「歩き回ったり躍ったり」。この言葉に、この男の中に湧きおこる賛美と喜びが見えてきます。毎日「美しい門」に連れてこられた…ということは、彼は決して一人で生きていたのではない。彼のことを気遣い、お世話をし、寄り添う人たちが身近にいたことが分かります。でも、その彼が心の奥底に抱いていた熱い願い。それは「神殿の中でみんなと一緒に礼拝すること」だったのでしょ。しかし、彼に許されてきた生き方は一つだけ。人びとに物乞いをして生きること。「邪悪なこの時代」にあって、そのような生き方に縛り付けられ抑えつけられてきた男を「イエス・キリストの名」は解き放つのです。ヘブライ語で「平和」は「シャローム」であり、「おはよう」「ごきげんよう」という毎日の挨拶にも使われていた言葉です。単に戦争がないという状態にとどまらない。神さまの恵み、祝福を心と体で感じて、喜びと賛美が湧きおこる状態をいうのです。その意味でこの時、この男の人の上に神のシャロームが実現したのです。教会はそのように、地の上の現実を生きる一人ひとりに神のシャロームが実現していくことを祈っていく集まりです。

三つ目は9～10節「民衆は…我を忘れるほど驚いた」。エルサレム神殿にはいくつもの「壁」がありました。「美しい門」から入ってすぐの広い中庭は「異邦人の庭」と呼ばれ、礼拝に来た人は誰でも入れる場所でしたが、その先には2.4mほど高くなっている「女性の庭」があり、次のような立札が掲げられていました。「この垣根を越える異邦人は死をもって罰せられる」。さらに「女性の庭」の奥には「男性の庭」といってユダヤ教徒の健康な男性しか入ることが許されませんでした。男性でも病気や障がいをもった人は「女性の庭」までしか赦されなかったのです。さらに一番奥は「至聖所」という大祭司しか入れない聖所があり、そこに神が現臨されると考えられていました。ですから、神を礼拝するといっても、神と人との間にはいくつもの「壁」がつくられ隔てられていたのです。それまで「障がい」を持つ人をはじめ、異邦人や女性などを礼拝から排除していた神殿は、その隔ての壁のすべてを「イエス・キリストの名」によって壊されたのでした。神に造られ命を与えられた私たちは、誰もが神を喜び賛美して生きるシャロームに招かれている。「邪悪なこの時代」がもつさまざまな壁を壊して、共なる礼拝をささげていくという大切な働きを、私たち教会は「イエス・キリストの名」において託されていることを今朝覚えたいのです。